三節　神界劇の行方

大本教が演じた神劇によれば、国祖国常立は復活したように説かれていた。しかし注意深く調べてみると、国常立の現われる時代が来たとは言っても、国常立そのものがどこでどのようにして復活したかは、必ずしも明らかではない。明治三十三年、出口ナオが冠島沓島を開いたことで、国常立が現われたように思われもするが、これは龍宮乙姫たちがひそむ龍宮界の出入口が開かれたのであって、国常立が復活したと説かれているわけではない。しかし、艮の金神と呼ばれる国常立が、金光教の川手文治郎や、大本教の出口ナオに神がかりしていることを、国常立の復活と見てとれないこともない。だが「由来記」によれば、この二者にかかった金神は国常立そのものではなく、川手文治郎には金勝金之神（きんかつかねのかみ）（金龍姫が男の神に変じた姿）、出口ナオには八百八光（龍宮乙姫より発した意志体のみの金神）がかかったのだという。この金神に、国祖復活の時を告げ知らせる役目をさせただけで、出口ナオの役目はあくまでも、彼女の本ミタマである若比売君の復活をかけた勤めだったと説いている。要するに国常立の正式な復活は、まだ成されてはいないということになる。

なぜこういう説かれ方がされているかと言えば、結局ドラマの本舞台は神界レ

ベルにあるのであって、龍神界の仕組は、その予告編とでも言うしかないものだからである。いくら龍神界の国常立が起きあがっても、神界の真の地球の主であるクニトコタチが復活しなければ、正しい活動はできないのである。また、出口ナオの若比売君や車小房の金龍姫が立ちあがって、その活動を始めたといっても、その本家本元である白山神界が立て直されて、シラヤマヒメやキクリヒメが神界レベルで復権しないかぎり、真の意味で立ちあがったとは言えないのである。要するに大本教を中心にした神劇は、龍神界レベルにおける仕組を、人間世界に型として現わすことが目的であって、その後を受けて神界の本舞台が始まるという予告編だったわけである。

　それはそれとして、「由来記」が語る龍神界のドラマを、神界の神々に当てはめてみると、非常に興味深いものが見えてくる。龍神界と神界は次元の違う世界だが、その両者には密接なつながりがあるのであって、神界の出来事が龍神界に映し出される仕組になっている。そういう意味では人間世界も同様であるため、ドラマの構図は、神界であろうと龍神界であろうと、さらには人間界であろうと、基本的には変わりのないものなのである。

　それでは神界と龍神界のドラマを簡単に重ね合わせてみよう。地球の主クニトコタチは同名だからそれでいいとして、イザナギ、イザナミは誰に該当するかと

言えば、神政内閣の首班、由良里彦と若比売君であり、アマテラスは日ノ神直系の山武姫、スサノヲは月ノ神の直系天照彦、そしてキクリヒメが金龍姫ということになる。これで神界と龍神界では、そっくり同じドラマが演じられたことがわかるであろう。しかし問題は、スサノヲが月ノ神の直系である、天系の天照彦になっているところにある。本来スサノヲはクニトコタチ直系の国津神であって、その意味から言えば、地球の象徴大地将軍に当てはめなくてはならない。だがこの場合、世界天皇のミタマとしての大地将軍は、大国主とせざるをえない。それではなぜスサノヲは月ノ神なのであろうか？

日本神話においては、スサノヲは海原（つまりは地球）を治める神であったとされているが、一説では、ツキヨミノミコト（月の神）もスサノヲであると言われている。これはどういうことなのであろうか？　地球と月が同じスサノヲであるということは、いったい何を意味しているのであろうか？　これを正確につきとめるためには、神智学の応用が必要になってくる。

「アーカーシャ年代記」の太陽系の進化の有様を、もう一度取りあげてみよう。地球が四段階の宇宙的周期を経過して、現在の地球期に入ったということは、すでに述べておいた。その四段階を、土星期、太陽期、月期、地球期と言っており、地球が現在のようになる以前は月のような存在であって、そこから月が放出され

て今の地球が出来上がった、と説かれていることも紹介しておいた。スサノヲがツキヨミだったと言われているのは、地球と月が分離する以前のスサノヲのことを言っているのである。そして、地球から放出された今の月をツキヨミと言っているのであって、月はかつて地球のスサノヲでもあったということになる。

はてさて、神話とはいったい何の話なのであろうか？

地球と月が分かれる前の地球、それを月期と言うが、それ以前の太陽期と呼ばれる状態のとき、地球は月とも太陽とも一体となっていた。このときの地球は太陽であった。それ以前にさかのぼると、地球は土星期と名づけられる状態にあった。土星とは、英語読みにすると「サタン」である。そしてサタンとは、言わずと知れた魔王のことである。いったいこれはどういうことなのであろうか？

太陽系の歴史を語る神智学の教説は、現在のように出来上がった姿の地球を基準にしてとらえると、何のことだかわからなくなる。神（人）智学は、太陽系そのものの発生から説き起こしているのであって、地球の発生だけを言っているわけではないのである。つまり、地球の第一段階の土星期というのは、惑星地球がそういう姿をしていたということではなく、太陽系全体のことを言っているのであって、太陽系発生以前の姿をとらえて表現しているわけである。

宇宙が誕生し、粒子が寄せ集められて、一つの星が生まれようとしている状態

が、リングを備えた土星の姿に似ているところから、それを土星期と名づけたのであろう。だが土星期と呼んだのは、それだけの理由からではあるまい。それはこういうことだと思われる。つまり、太陽系全体の主は、キリスト教流に言えば、サタン、この段階ではサタンに変化する前の、ルシファーだったということなのである。大本教が言う大国常立というのは、太陽系全体を包み込んでいる、この神のことを言っているわけである。

粒子が次第に寄せ集められ、それが次第に密度を増していくと、科学的な作用が起こって、その土星的集合体は光りはじめる。星の誕生である。これを太陽期と呼んだわけであるが、この星は今の太陽とは違って、太陽系全体を包み込むほどに、規模の大きなものである。光をもたらすもの、大天使ルシファーというのは、この状態にあったときのことであろう。

宇宙にさんぜんと輝くこの大きな星が分解して、現在の太陽系が生み出されていくことになるのであるが、なぜそんなことが起こってしまったのであろうか？

この大きな星オオクニトコタチは、光り輝く恒星のままでいることもできたはずである。それが小さな太陽と、それにまつわりつくような物質惑星に分解、つまり物質レベルにまで次元を落とさねばならなくなったのには、それなりの理由があるはずである。

その理由に関しては、天の父神より自分を高みに置こうとしたルシファーが、そのおごりをとがめられて落とされた、とキリスト教で言われていることは何度も記してきた。龍神界の教説の中にも、国常立があまりにも強く我を張りすぎたために、押し込められたという記述がある。このことがどういう意味を含んでいるかということも、前記しておいたが、オオクニトコタチは宇宙神界の主神アメノミナカヌシを越えて、根元そのものとつながろうとしたのである。根元の主の意志の現われが宇宙世界だとすれば、その宇宙世界の秩序に従うべきであって、その秩序を越えて直接根元につながることは、秩序違反だと罪に問われたわけである。そのためオオクニトコタチの大きな星は、次元を落として太陽系に変貌し、オオクニトコタチは地球に押し込められて、魔王クニトコタチとなったわけである。

しかし、太陽系全体はオオクニトコタチであることに変わりはなく、出口王仁三郎が太陽神アマテラスを、オオクニトコタチの霊徳が完全に発揮されたときの神名であるとするのは、このことを言うのである。太陽そのものはオオクニトコタチではあるが、もともと様々な要素で構成されていたものが、次元を落として太陽系のような姿に変貌してしまったわけである。そして、罪を問われたオオクニトコタチの主要部分が、地球として物質化していくことになる。神智学が地球

から太陽が放出されたと説くのは、あくまでもオオクニトコタチを中心にして取りあげるからであって、このときオオクニトコタチという大きな星は、光を失い、変質して太陽系を造り出していったわけである。それは、すきとおったアメーバーの中に内蔵が見えるようなもので、太陽系全体が一つの有機体であって、その中の要素がはっきり区分けされて見えるようになった、と表現すればわかりやすくなるのかもしれない。太陽を放出して、天の父神の要素と分離した地球は、さらに残りかすのような月を分離して、現在の地球を造り出し、この物質地球の上に、みごとな自然を生み出していったのであった。

ここまでの過程が、実は第一章で取りあげた神話の、自然現象的な内容なのである。たとえば、オリエントのアッカド時代の神話「エリマ・エリシュ」（天地創造物語）などは、神々の戦争を天地創造以前のドラマとして語っていた。その物質化以前の神々のドラマこそが、「アーカーシャ年代記」の神界版なのである。神々とは、五次元界の存在であって、神がかりでもしないかぎりは、物質三次元界までくだってくることはない。五次元界が物質世界に現われた姿は、光輝く星であって、その星の世界にこそ神々の本舞台があるのである。地球が太陽期にあって光り輝いていたころ、神々の世界は太陽系全体をおおうほど広々としていた。その舞台で神々は、神話に伝えられているドラマを演じたのである。そして

その結果が太陽系を形成し、物質地球を生み出していったのである。と言うよりも太陽系が生まれ出て、今のような世界にまで変化してきたそのことが、神話そのものであると言ったほうが、より正確であろうか。

こうして考えてみると、キリスト教をはじめとする霊界宗教が、人間的倫理感をふりかざして、悪しき魔物扱いする地系の神々が、はたして彼らがとがめだてるほどの罪を犯したのかどうか、疑問に思えてくる。少なくとも神話にそうした善悪とか、罪といった倫理的な要素が入ってくるのは、一神教が起こり、霊界宗教が人間世界に根を張ってからのことである。神話そのものは、それがどこの神話であっても、神々のドラマをたんたんと語るのみで、ほとんどそこに倫理観などかぶせたりはしていない。

たとえばギリシャ神話においては、親が子を喰ったり、子が親を殺したりなどということは、当然のことのように語られているし、男女間の乱れなどは、むしろ娯楽的なことのように語られている。それに何といっても、天下を取った父神ゼウスが誰にも増して色好みであって、妻の目をかいくぐっては情事に明け暮れている。母と子の近親相姦が表に出てくるのは、やっと人間世界に反映したオイデプス王においてであるが、しかし、当時太陽崇拝をしていたエジプト王朝では、近親結婚は王家の血統を守るために神聖視されていたし、拝火教＝太陽崇拝

のゾロアスター教は、近親相姦を魔術師を生むために奨励していた形跡がある、そんな指摘が学者によって成されてもいる。地系の神々だけが罪を犯しているわけではないのである。地底に封じ込められた神々は、神話で見るかぎり、ただ戦いに敗れたというだけのことである。後になると、彼らは罪を犯した悪魔ということにされてしまうが、罪になるような悪は、オリンポスの神々も目をそむけたくなるほどやっている。それでありながら霊界宗教になると、突然それが倫理的な色づけをされて、善悪がはっきりと分けられてしまう。天の父は至高、至善、至美であり、地の母は醜悪な淫婦で、さらには悪魔や魔女へと脚色されていく。

それはそれとしておいて、神々の近親相姦がもたらした地球誕生を、もっと別な面から考えてみることにしよう。

星の大神であったオオクニトコタチから見て、物質化するということは、どういうことだったのであろうか？　罪を犯して落とされた、というただそれだけのことなのであろうか？　筆者には、必ずしもそうとばかりは言えない要素があると思われてならない。この点に関して神智学は、地球の物質化は生命進化の場として、必要な行程であると説いている。神レベルでも、やはり同じことが言えるのではあるまいか？　物質化という制約を与えなければ、発達しきれない何かが神々にもあるのではないだろうか。そのためにオオクニトコタチは、物質次元に

まで身を落としたのではあるまいか。つまり、根元をめざす者にとっては必須の条件、飛躍の一過程だったのではないだろうか？　筆者には、どうしてもそんな気がしてならないのである。あるいは、クニトコタチの背後には根元の意図が隠されていて、それにのっとって物質次元へ降りてきたのではないのかと……。

根元をめざすことを傲慢な行為だと決めつけるミカエルなど、父神サイドの天使たちには、根元をめざして進化しようとする、ルシファーの向上心が理解できないのだろう。だから根元に向かって昇ろうとするルシファーが、父神を越えようとする傲慢な姿勢に見えるのである。ルシファーは権力奪取をめざしているのではなく、生命進化の道を極めようとしているのである。だが、その生命進化の物質化への道が、神的ドラマでは近親相姦の結びつきとして現われてしまうところに、神律違反を問われる原因がある。しかし、神々の出現、結びつきというものは、人間レベルの倫理観でとらえきれるほど、単純なものではない。物質化することが、生命進化の一つの道筋として必要な過程であるとするならば、たとえそこに神律違反があったとしても、その結びつきはむしろ肯定的なものとして、見直されなければならない面が出てくることになる。自然豊かなこの地球物質世界が誕生したのは、クニトコタチの意図するところ、スサノヲとイザナミの神の働きの結びつきによって、はじめて達成されたことなのである。地球外からやっ

て来る宇宙人によれば、地球は大自然の恵みあふれたまれに見る美しい星であるという。犯罪行為からはたしてそれほど美しい自然が生まれ出るであろうか？我々はもう一度、神話をとらえ直す必要があるのではないかと思う。

宇宙世界の星の神々がどう考えようと、オオクニトコタチにとって、その身を物質次元にまで落とす必要があったとすれば、それはこういうことではないかと思われる。つまり、次元が下がって物質的限界度が高まれば高まるほど、現象界のすべては凝縮されて、循環の速度、輪廻の速度が速くなる。恒星レベルで生命進化をはかるよりも、惑星の物質レベルで生命のいとなみをはかるほうが、はるかに時間の短縮が可能になるのである。宇宙の恒星の一年は、地球での何百年、何千年に当たる。生命進化という意味から言えば、星では長生きできていいということにはならないのである。同じ一生を経験するために、一方で何千年何万年かかることが、地球では五十年か百年でできてしまう。ここに物質世界が生まれなければならなかった理由があり、人間が神々に似せて造られ、その中に神々の生命を吹き込まれる意味があるのである。この物質地球は、神々をも含めた生命進化の、いわば試験場として造り出されているのである。宇宙世界を表現化したのが根元の意志であったとするならば、こうした物質世界が生み出された背後にも、当然根元の意図があったと考えなくてはならない。それが自然な考え方とい

うものであろう。もしそうだとすれば、この地球世界を造り出すためのスサノヲとイザナミの結びつきは、必要不可欠な働きだったということになる。

大自然宇宙の生のいとなみから神的要素を抜き取って、神智学のように科学的にものを考えれば、この生命進化、宇宙輪廻の現象は、もっとすっきり肯定的に語れるにちがいない。だが、大自然そのものの背後には神々の働きがあって、その神々の表現体がこの宇宙大自然であるという現実は、やはり認めなくてはならない。それをおおい隠して、人間の都合のいいように理屈をこねてみても、真実を求める人間の心は満たされはしない。宇宙世界には神々の生活圏があり、この太陽系惑星の物質地球にも、その神々のドラマが映し出されている。真実の世界に生きようと願う者は、その現実を正しく認識する必要がある。その真実が見えてくると、人間の生きざまですらが、宇宙世界に影響を与えていくこともあるという、驚くべき事実もわかってくるのである。

地球が発生する以前の話として語られたりする神話は、未開人種の夢物語などではなくて、宇宙が創造されたときから現代まで、延々と続けられてきた神々のドラマである。物質化が進みすぎたために神々との距離が遠くなり、現代人には無関係な存在と考えられがちな神々ではあるが、今現在でも休むことなく、神々は太古から続けてきたドラマを演じ続けている。もっとも我々人間にとってはド

ラマにしか見えない神話も、神々にとっては生のいとなみそのものであって、筋書きのあるドラマが演じられているわけではない。星が生まれたり、分解したり、消滅したりすることが、いかに神レベルであろうと、生半可な気持でできるはずがないのだから。だからこそ生きるか死ぬかの大戦争を神々が起こすのであって、その神々の生の軌跡が人間世界に映されて、我々が狂い舞わねばならなくなってくるのである。人間レベルの倫理道徳などで、戦いを終結させることなどできはしないのである。

だが、時は一つの区切り目を我々の元に運んできてくれた。長い長い忍従の時を経て、クニトコタチが復活する時がめぐってきたのである。罪に問われて物質地球の底にひそみ、魔王として恐れられ、憎まれ、嫌われてきた地球の主が、宇宙循環の時に耐えぬいて、再び日の当たる活動舞台に登場しようとしている。この時を恐れていた、アマテラスをはじめとする天系の神々は、それを阻止しようと数千年も前から、様々な妨害工作を仕組んできた。だがそれも虚しく、時はすべてを流し去って、地球に新しい生命をめばえさせ、新たな時代をもたらそうとしている。

物質化に向けて下向していくばかりであったクニトコタチは、この地球においてその極にたどり着き、その世界を見きわめ終わって、これからは反転して生命

進化の歩みを上昇軌道に乗せるために、その姿を現わそうとしている。そうしたクニトコタチの動きは、今、地球のすべての生命に、様々な影響を与えつつある。地球の主クニトコタチが復活することは、地球神界の秩序が再編されることであって、地上人間界にも大きな変化をもたらさずにはおかない。人類が滅亡することになるかもしれないほどの大戦争が起こるのも、クニトコタチを封じ込めた天系の神々と、クニトコタチを盟主とあおぐ地系の神々の対立抗争が、人間世界に映されるからにほかならない。

太古から生きてきた神々のドラマは、地球世界の様々な次元、様々な領域で何度も繰り返されてきた。人間の誕生が、長い生命進化の歴史を母の胎内でたどり終えてから成されるように、この地上世界に現われた我々人間も、注ぎ込まれた神々の性格や経験を受け継いで、神々のドラマを人間世界で繰り返しながら生きている。神々は自分の分けミタマを人間に注ぎ込むことによって、少しでも新たな経験を得ようとする。そうして生命進化の輪廻が、神レベルでも成されていくのである。物質世界においては、人間に活動舞台を明け渡さなければならない神々は、そのように人間を通して自らの生命の成長をはかっていくのである。だから人間世界には、神々が演じたドラマが、時代ごと、民族ごと、国ごとに、様々な変奏曲をかなでながら、何度も繰り返されていくことになる。そうして

神々のドラマは、少しずつ進んでいくのである。

そして、時がめぐって一つの大きな節目がくると、そうして蓄えられてきた経験を持ち寄るようにして、神々による一つのドラマが織り出されていくことになる。本書が取りあげてきたものが、そうした人間による神々のドラマなのである。そして、龍神界の仕組によれば三千年、神の仕組とすればもっとはるかに長い時を経て、大きな時代の転換の時とともに、神々による生命進化の一大ドラマが、今地上で演じられつつある。大本教を中心にして龍神界のドラマが演じられた後を引き継いで、いよいよ神々による本舞台の幕が、この日本において開かれたのである。

大海の波打ち寄せる日本という小さな島国は、現時点における地球のヘソ（中心）であって、この自然豊かな日本には、神々による地球進化の仕組が隠されてあった。そして、二十世紀末の今現在、神々の意志を受けて活動するミコトモチによって、地球新生脱皮へ向けての神界劇が演じられつつある。大本教が型見本として現わしたような、国祖国常立を中心にした地系の神々の復活が成るか、それともキリスト教が、世界中を巻き込んでめざしてきたイエスキリスト＝天の父神の再臨が達成されるか、それは今日本において取り組まれている神界劇のありようによって、決まることになっている。

神智学が言う、アトランティス人種の最終第七段階、蒙古族日本人の地球人類に貢献する役目とは、このことなのである。人間精神が一つの進化を極めるとき、その人間のミタマを通して偉大な光が地球世界にもたらされ、全人類、全地球、全太陽系にふりそそがれる。その新たな光を受けるもろもろの生命は、新しい進化への脱皮をはじめ、新しい時代の幕が開かれていく。人類が待ちに待った新しい時は来たのである。

だが新しい時代をもたらす光には、選ばれなくてはならない二つの光がある。キリスト教によって望まれてきた天の父神の光か、それともユダヤ人たちが耐えに耐えぬいて待ち続けてきた、根元につながる地球の主の光か、我々地球全生命は、そのどちらか一方の光で満足するしかない。現時点でこの両者が並び立つことはないからである。

現在の地球世界を支配している天系の神々が、その支配体制を守りぬいて、イエスキリストよりもはるかに高い、神界の父神をこの地球に迎えるためには、このけがれきった地球世界の大掃除が成されなくてはならない。予言者たちが、繰り返し声高に叫び続けてきたハルマゲドン、最後の審判がそれである。最後の審判とは、淫婦母神、大地母神の贖罪のことである。母神の贖罪が成され、落ちた母神が名誉を回復して父神と共に立つ、それがあって初めて父神イエスキリスト

の再臨は実現する。父神への期待を述べるのはたやすい。しかし、期待だけで至高の父神の光が、この地上に現われることはない。そのけがれのない天の光を受け入れられるだけの、清浄な世界が準備されて初めて光は届けられるのであって、現在の我々の地球世界は、まだ天の仲間入りができるほど、清められてはいないのである。そんな世界にはたして父神が降りて来るであろうか？　人類を滅亡させてまで、それほどの犠牲をはらってまで、どうして父神が今降りて来る必要があるのだろうか？

予言されてきたように、天と地の全面的な戦いが現段階で起こるとしたら、もし最後の審判が起こるとしたら、生命を失う者は人類の三分の二ではすまず、人類の九十五パーセントは死滅すると考えておいたほうがいい。わずかに残ったエスキモーが、荒れはてた地球新時代の新人類である。こんな世界に、至高の天から父神が降りて来て、何になるだろう。地上が住むにふさわしくなるまでに回復して、新人類が地球上に広がっていくまでに、どれほどの時間がかかるであろうか？　千年だろうか？　それとも二千年かかるだろうか……？　空中携挙とか、人工衛星に避難してイエスキリストの再臨を待つ、などという夢物語にすがっても仕方がない。キリスト教の説く救いは、死後の世界のことである。

最後の審判が起こるのは、地球が一つの大きな周期を終え、物質三次元世界を

越えて新次元に突入するときに起こる現象で、それはまだまだ先のことである。

それでは、地系のユダヤ人たちが待ち続ける魔王、クニトコタチが地球神界に復帰するのは、確実なことなのであろうか？　天の父神が降りて来る可能性は、皆無なのであろうか？　現時点（平成元年）では、そのどちらに関しても断定はできない。父神が現われる可能性はほとんどなくなってはいるが、クニトコタチもまだ立ってはいないからである。だが、一九九九年までには、別なものは現われるはずである。

魔王クニトコタチが立つくらいなら死んだほうがましだと、キリスト教徒をはじめとする現体制側の人々や、天系の神々は考えるかもしれない。体制側のその抵抗が、新時代の到来を遅延させる。魔王は魔王として立つのではなく、地球の主として神界に復帰するだけのことなのだが、その正統権を認めない神々がいるかぎり、地球の変革は手間取ることになる。神界に復帰する地系の神々が、つぶされたうらみをはらすために、天系の神々に逆襲すれば、同様に地球に大惨事が起こる。もしそれで地系神が勝利をおさめたとしても、天の神々のいない地球に生命は育たない。生命進化の場であるこの地球に、天の神々は絶対不可欠な存在である。その不可欠な神々をクニトコタチが抹殺するはずがないし、封じ込めるはずもない。にもかかわらず、主神の地位を明け渡さなくてはならない天系の

神々にとっては、今まで足げにして軽蔑してきたクニトコタチに、頭を下げる屈辱に耐えられない。その抵抗が、新時代の秩序を乱すことになる。

クニトコタチが立つときは、ハルマゲドンは起こらない。だが新時代へ移行するためには、天系の神々との間に様々なトラブルが絶えないだろう。それでも確実に新時代はやってくる。そして、地球は少しずつ浄化されていって、天の父神が降りられる環境が整えられていくことになる。千年かかるか、二千年かかるか、それはわからない。だが、いずれ父神はくだって来る。

予言者たちは、イエスキリストの再臨後のことを、至福千年と言ってきた。キリスト教徒が待ち望んできた救世主の時代も、千年だけである。その後のことを予言者は語らなかったが、その後には、封じ込めた魔王が現われて、地球の主として復帰するのである。結局どちらが先に来ても、最終的には同じ所へ行き着くことになる。そしてそこで初めて人類の理想郷、神々の調和が達成されるのである。それが待ちきれずに、神も人も先を急ぐ。結果を焦って争い狂う。せめてその真相を見きわめた者たちだけでも、調和を求めてミタマのケガレを洗い流し、生命進化の道を進めようではないか。

地球の主クニトコタチの生命進化の道は、下向の時を終えて、上昇の時に移った。地球は降りてきた道を、今度は登っていく。月はやがて消滅し、地球はいず

れ太陽と合体することになるだろう。そして、クニトコタチは太陽系全体を包み込んで再び輝きはじめる。その輝きは、かつての輝きよりもはるかに強く美しく、宇宙の誉れと讃えられることだろう。そしてその大きくて美しい星は、宿願を達成して根元へと回帰する。ブラックホールの誕生である。

若い星々は、その黒々として奥の知れない穴を遠くから眺めながら、こう言うにちがいない。

「近寄るなよ、吸い込まれるぞ！」

そして若い彼らは、そんな暗い穴のことなどすぐに忘れてしまい、宇宙の一角に新しい星が誕生するのを見つけて、はしゃぎながら祝いにかけつけることだろう。

（平成元年六月十七日初稿終了）